

2022年1月23日（日）主日朝礼拝説教

『出会い』井上隆晶牧師

Ⅱペトロ1章4～11節、ヨハネ福音書1章35～45節

①【洗礼者ヨハネの証し】

最初に洗礼者ヨハネの証しについてお話をしましょう。彼は「大洗礼運動」をしました。彼の悔い改めの呼びかけに全国民は動き、ぞくぞくと荒野にいるヨハネの元に来て洗礼を受けました。これだけ国民が動く政府も黙っている訳にいかず何らかの対応をしなければなりません。議会はヨハネの元に使いを送り、「あなたはどなたですか」「エリヤですか」「あの預言者ですか」と質問をすると、彼は「私はメシアではない」「違う」「そうではない」とことごとく否定し、「自分は荒野の声である。やがて私の後から、あなたがたがまだ知らないあの方が来られる。私はその方の履物の紐を解く資格もない者だ」とだけ伝えます。使いは答えを得ないまま帰って行きます。ここを読んで読者は、「私たちのまだ知らない、あの方とは一体誰だろう」という思いを持ちます。

そして「その翌日」(29)、初めてイエス様が登場します。ヨハネは自分の方へ来るイエス様を見て「見よ、世の罪を取り除く神の小羊だ。」(1:29)と証します。そして「その翌日」(35)今度はヨハネは自分の二人の弟子と共におり、歩いておられるイエス様を見つめて「見よ、神の小羊だ。」(1:36)と二人に証します。まるで「この方を、お前たちを会わせたかったのだ」とでも言っているようです。二人の弟子はそれを聞いてイエス様に従って行きました。洗礼者ヨハネの目はいつもキリストに向いています。そして、自分の弟子たちが自分から離れてキリストに従って行くことを喜んでいます。これが本当の教師です。教師の仕事は、本物の神に人を出会わせることです。親の仕事は、子供たちを本物の神に出会わせることです。そのために自分も神に従って生き、神が本当に生きていることを証しするのです。それができればもう、教師や親の役割は終わりです。彼は他の個所でもこのように言っています。「天から与えられなければ、人は何も受けることはできない。…私は喜びで満たされている。あの方は栄え、わたしは衰えねばならない。」(ヨハネ3:27、29)

私たちの地上での働きというものは、それがどれだけ素晴らしい人間的な動機で始められたものであったとしても、「天から与えられたもの(働き)」でなければなりません。そうでないと続かなくなり、無理をしてやり続ければ必ず人間的な欲が入って実を結ばなくなります。人の働きには「分」というものがあります。仕事は神が与え、神が取られるものです。人間の罪とは、自分の分(分際)を忘れ、神になろうとしたことだったことを忘れてはなりません。

●マザー・テレサにあるジャーナリストが「なぜこんな奉仕を続けるのか。こんなことをいつまでもやっても状況は変わらないではないか。もっと政府に働きかけ、社会を変えるほうがいいではないか」と言われた時「主が私にきなさい

と仰せられたことを私はしているだけなのです。それ以上のことを主は私に言われませんでした」と応えました。

誰でも自分の栄光を求め、それがいつまでも残ることを願うものですが、ヨハネはそうではありませんでした。いつもキリストの栄光を求め、キリストが大きくなることを願い、自分が小さくなることを喜びました。大したものだと思います。自分は「あれをした、これをした」という自慢話ではなく、「神がこれをして下さった」というものが本当の証しなのです。礼拝の中で人間の業が賞賛されるのではなく、神のすばらしさが語られてゆく。あまりの神の愛の豊かさに、スケールの大きさにただただ頭が下がり、次第に膝まづき、ひれ伏してしまうような礼拝をしたいものです。

②【イエスのもとに泊まる＝真の安息】

この二人の弟子とは、一人はアンデレであり、もう一人は愛弟子ヨハネだといわれています。「イエスは振り返り、彼らに従ってくるのを見て」(38節)とあります。イエス様に従い始めると、イエス様はすぐに振り返って私たちを見てくださいます。そして主は「何を求めているのか」(38節)と問われます。ヨハネの福音書に最初に出てくるイエス様のことばです。それは質問のことばでした。イエス様は皆さんにも同じように尋ねます。あなたは私に何を求めてついてくるのですか。何を期待しているのですか。豊かになることですか、病気の癒しですか、仕事が繁盛することですか、自分の夢が適うことですか？あなたは何を求めていますか。自分に問いかけてみましょう。二人の弟子たちは「ラビ、どこに泊まっておられるのですか」と尋ねます。彼らはイエス様の質問に答えていません。さし当たって「あなたのお家はどこですか」と尋ねたということでしょう。イエス様は「来なさい。そうすれば分かる」(39節)と答えます。イエス様は言葉で説明されません。ついてくれば分かると言われます。そして彼らはついて行って、どこにイエスが泊まっておられるかを見ました。そしてその日は、イエス様のもとに泊まりました。「午後4時ごろのことである。」と時間まで伝えています。たぶんその日の夕方6時から安息日が始まるので家に帰れなくなったのだと思います。福音書は「泊まる」という言葉を三回も用いて「泊まる」ことにこだわって書いているように思います。これは「読者よ悟れ」と言っているのです。イエス様のもとに泊まる。これこそ真の安息日の過ごし方なのです。なぜならイエス様こそ、まことの命、真理、神への道、赦しだからです。永遠の命のある場所に完全な喜びがあり、完全な赦しのある場所に完全な平安があります。それ以外、一体私たちはどこに休息を見出すことができるでしょう。ひな型であり影の安息日は過ぎ去りました。彼らは自分の家に帰れなかったけれども、本当の魂の家に帰ったのです。ここには静かな平安があります。

●曾野綾子さんの本の中に「中年以後に意識すべきことは、自分がいなくても誰も困らない、という現実を認識することである。」「わたしたちが持っているもの

一命も、家族も、悲しみも、喜びも、物も、この世とのかかわりも、すべてがやがて時の流れのなかに消えてゆく。永遠に自分のものであるものなどないのです。…あらゆるものは、一時的に私たちに貸し出されたものです。」と書いてありました。最近「私がどうしてもしなければ」と思わなくなりました。先週の礼拝で聖餐をいただいた時「この世の全ては過ぎ去る、時間は元には戻らず、失った若さも幸せも帰らず、人間の業も、幸いも不幸もすべて過ぎ去る。でも私の中にパンとぶどう酒の姿で入ってきたキリストは永遠に残る、この方が私になさったことは永遠に消えない、それだけでもう十分だ」と思い、心が平安になったのです。完全な者、変わらない者につながる事こそ平安の秘訣です。

③【キリストと出会う＝新しい自分の始まり】

アンデレはまず、自分の兄弟シモンに会って「**私たちはメシアー油注がれた者という意味ーに出会った**」(41 節)と言いました。アンデレは兄弟シモン・ペトロと違い、地味な人生を歩みましたが、洗礼者ヨハネの弟子として訓練を受け、師の紹介でイエス様に出会い、一夜の語りを通してイエス様を「メシア」と告白した人です。彼の宗教的感性はすばらしいものがあります。そしてすぐに兄弟シモンをイエス様に会わせました。伝承によれば黒海沿岸にまで出かけ伝道に生涯をささげ×印の十字架に架けられて殉教した人物です。彼がシモンをイエス様のところに連れて行くと、イエス様は彼を見つめて、「**あなたはヨハネの子、シモンであるが、ケファー《岩》という意味ーと呼ぶことにする**」(42 節)といわれます。イエス様とシモン・ペトロとの出会いはとてもユニークです。イエス様はシモンに「岩」というあだ名をつけられました。しかし、この「岩」という名ほど彼の生涯を表現している名はないでしょう。それは①まことの岩であるイエス様を土台として歩む者になったこと。②失敗も多かったペトロが、教会の土台「岩」とされたこと。③岩の上に家を建てる人＝御言葉を行う人に変えられていったこと、を象徴しています。

イエス様はペトロの中に、将来の姿、本来の姿、可能性を見てください、それを信じ続けてくださいました。イエス様はペトロが今、どんな人間であるかということではなく、どんな人間になるかを見ていてくださいます。あなたの人生を私に委ねなさい。私はあなたを善いものに変えてあげようとイエス様はいわれます。名前が変わるということは、神との新しい関係に入ったということのしるしなのです。その新しい名前を目標として信仰の人として生きることです。

●先週の朝の祈りで、第一ヨハネの手紙を読んだ時「闇が去って、既にまことの光が輝いているからです」(2:8)という言葉に目が留まりました。まことの光とはキリストの事です。太陽が昇れば闇は去ります。キリストが来たので、闇の世界はもう終わったのです。自分で頑張って戒めを守れば赦されるというような世界はもう終わったのです。すべての人(他宗教の人も、信じない人も)はもう赦されているのです。なぜならキリストは「全世界の罪を償ういけにえ」(1:2)だ

からです。18日（火）にカトリック玉造大聖堂で一致祈祷会がありました。気持ちよかった。「公現祭」の説教をされた聖公会のU牧師はこう言われました。「神はもうご自分を現わしてくれました。目が覚めたら、神の愛の内に目が覚めるのであり、神の愛の内に今日も一日を終えるのです。そうやって当たり前のことを信じ続けると、すばらしいゴールが待っているのです。」と言われました。

このキリストの光の中には完全な赦しと命があります。この光の中を歩むのです。そうすれば闇に陥ることはありません。光から出てはいけません。この光の中を歩むなら、光に照らされて私たちも変わってゆくのです。